



金メダリストの挑戦

トリノ・パラリンピックを終えて

大日方邦子
アルペンスキー選手

2006年4月18日

冬季トリノ・オリンピックで日本は荒川静香選手の金メダル1個だけだった。が、パラリンピック選手団は大活躍。金2、銀5、銅2の計9個のメダルを獲得した。レベルの向上とともに障害者スポーツも競技化が進み、練習、遠征などのための経済的負担は限界にきているという。海外では賞金やスポンサー契約で“プロ選手”として活躍するパラリンピック選手もいるらしい。日本選手団主将も務めた大日方選手（女子大回転座位で金メダル、女子滑降座位とスーパー大回転座位でそれぞれ銀メダル）も、パラリンピックのメダルの価値を高め、アスリートとして自立していく道を模索したい、と。

© 日本記者クラブ

今回のトリノ・パラリンピックでは、メディアの皆さんには、たくさん取材をしていただきました。日本選手団としては、非常に手ごたえを感じた大会だったと思います。記者会見やインタビューのたびに、選手それぞれの言葉が新聞やテレビ、あるいは雑誌という形で日本に流れて、私たちのことを知っていただく機会を持てた。これがとても私たちの力になりました。私たちのパラリンピックを、どれだけ多くの人に知ってもらえるのかということが、これからの私たちの活動しやすい環境を作る役に立つはずですし、環境が変わっていくきっかけになるはずだという思いから、選手はそれぞれお話ししていることだと思います。

メダル対象の種目減り競争激化

トリノ大会を終えてみて一番感じることは、ソルトレークよりも、もちろん長野よりも、競技化が一層進んだということ、この一点につきると思います。私はリレハンメル、長野、ソルトレーク、そしてトリノと4回出ておりますけれども、4年ごとにこれほど大きく世界が変わっていく大会もないのではないかと思います。そういう意味では、次の4年も恐らくこのスピード、あるいはこれ以上のスピードで変化し続けるんじゃないかと思っています。

方向性としては、オリンピック化と言われておりますが、パラリンピックではこの先、ますます競技としての要素が強まっていく。そう言い切つてよろしいかと思っています。

では今回、具体的に競技化が強まったところですが、一つは、障害別のクラス分けが3カテゴリーになったことです。従来は障害の種類とその程度に細かく分けていて、それを種目ごとに、基本的には人数が成立すればメ

ダル表彰の対象の競技にしていました。それを今大会からは、座って滑る人、立って滑る人、視覚に障害がある人と、選手を3つのカテゴリーに分けて、メダルの表彰が行われたわけです。

これはどういうことかということ、一言でいえば競争が激化したということだと思います。例えば、男子のジャイアント・スラロームで比較すると、ソルトレークの中には、各カテゴリー合わせて9個のメダル、9人の金メダリストが出ていたんですね。それが3カテゴリーにした結果、3つに減りました。特に顕著なのが、立って滑っている立位の選手の場合です。4クラスだったものが、1つのメダルになっている。ソルトレークでは4人の金メダリストが出ていたのに、今回では一人の金メダリストだけになったということですね。

日本チームに三沢拓という立位の若手選手がいます。片足で滑っている選手で、今回スラロームで入賞も果たしているのですが、大回転では彼は10位だったんですね。8位までが入賞ですので、入賞すらできなかったということです。ところがLW2という彼の片足で滑るクラスで、ほかに彼より上の順位の選手がいるのかなあと調べるといえないんですね。ということは、もしソルトレークと同じルールが適用されていれば、彼はトリノ大会で金メダルをとれたはずだったわけですね。それが今回、入賞にも至らなかった。それだけ競争が激化したといえると思います。

競争相手は多い方がいい

では、この3カテゴリー導入を選手はどうみているんだという話をしたいと思います。メディアの皆さんからは大会の前も大会期間中も、そして大会後も、繰り返し、この点を

質問されました。結論からいうと、選手はこの新ルールになじんでいて、大賛成なんです。

「なぜ大賛成なんですか」とよく問われるんですが、やはり競技なので競争相手が多ければ多いほど、あるいは競い合いが激しければ激しいほど、やりがいを感じるわけです。そこにおもしろさを感じる。これは、選手のある種本能なのかもしれないんですけども、そこにおもしろさを感じる選手がほとんどなんです。

確かにこの3カテゴリー性が導入されるにあたっては、多くの議論が世界的に、また選手間でもありました。アスリート委員会というようなものもあり、そこで議論されましたし、実際、ソルトレークでは各国チームとしての意見をまとめて、投票が行われました。そうした議論を長年経ていった結果が、3カテゴリーというところに行き着いているんだと思います。

メダルの価値を上げたい

選手仲間にも何人か、意見を聞いたりしましたけれども、結局、選手たちが求めていることは、「メダルの価値」なんだと思います。メダルの価値を上げたいというのが選手の最大の望みなんです。公平性という観点では難しさがあっても、一番重要なことは「メダルの価値」だということに、どうも落ちつきそうなんです。

何のためにパラリンピックに出場し、なぜメダルを目指すのか。選手のモチベーションという部分で、このメダルの価値というのは最も密接につながるところだと思っています。

競技化が加速した今大会の特徴を表している例をもう一つ、紹介しましょう。パラリンピックに出場できる選手を、世界ランキングによって厳格に規制したことです。いままで

は、それぞれのナショナル・パラリンピック委員会（NPC）が推薦した選手、あるいは一定の要件を満たした選手であれば大会出場を認めるというように、条件が緩やかな時代も実はあったんです。けれども、トリノに関しては、例えば、日本の国内選手権で優勝しても、パラリンピックに行けることは直接的にはつながらなくなったのです。これは、健常者のアルペンスキーの世界ではごく当たり前のことなんです。

4年間国際レースに出場し続ける

パラリンピックに出場する権利を得るためには、国際レースに出場し、国際ランキングを獲得する必要があります。簡単にいってしまえば、ワールドカップという世界レベルの大会があります。その下に各コンチネンタルカップという、それぞれの地域で行っている大会があります。そのような国際基準を満たしたルールのもとに行われた大会に出場して、ランキングを得ることがパラリンピック出場の前提条件になりました。

実はアルペンスキー界では、この国際ランキングは有効期間が15カ月と決まっております。裏を返すと、選手は4年後のパラリンピックに出場するためには、ランキングを取り続けなければいけないわけです。ですからランキングを維持するには国際レースに出場し続けなければいけないのです。

けれども実は、ワールドカップそのものも、だれでも出られる大会ではないのです。ワールドカップに出るためにはまた、パラリンピック同様、一定の国際ランキングを持つ必要があります。はじめてランキングに乗る選手は、まずはワールドカップよりも格下の大会、コンチネンタルカップなどに出場しなくては

けません。今大会に出場した選手は、この4年間、国際レースに出続け、その結果としてトリノがあったのです。ですから、バンクーバー大会を目指す選手は、次の4年もまた同じように国際試合に出続ける必要があります。

スポーツの世界ではごく当たり前のことなのですが、それがいままでパラリンピックでは整備されていなかったことなんですね。そのあたりのルールがようやく、整理されてきたなというところです。

では、これらの国際試合がどれくらいあったのか。数えてみますと、パラリンピックが行われた今シーズン、2005年から2006年にかけてのシーズンだけで、ワールドカップは3会場で12レース行われました。そのうちの1会場は、長野県の志賀高原でした。今回、志賀高原では、技術系種目、大回転(GS)を2レース、回転(SL)を1レース行いました。日本で初めて開かれたワールドカップです。

では来年、国際大会はどれだけあるんだろうと、私も調べてみて驚きました。ワールドカップが1月にアメリカで、3月にヨーロッパの2カ所で行われまして、3会場であわせて20レースが予定されているのです。これだけたくさんの国際試合に出場するためには、それなりの練習をする時間も必要ですし、シーズン中は日本と海外を往復することになります。

こうしたお話をしましたのは、パラリンピックに挑戦するためには、スポーツに専念できるだけの環境が必要不可欠になってきているということ、ぜひ皆さんにおわかりいただきたいと思ってのことです。

パラリンピックに出場する選手が競技にどの程度の力をかけるべきなのか、トップレベルの選手が求められるものは、年々、大きく変わってきています。長野からソルトレーク

までの4年間と、このトリノまでの4年間とを比較しますと、年間の試合数だけでも相当変わってきているのです。試合数が増えているということは、海外に出かけなければいけない機会もふえる。

その意味では今回、志賀高原でワールドカップを行ったということは、非常に重要な意味を持っています。日本国内で国際試合を行えば、移動が少なくてすみやすから、体力的にも金銭的にも日本チームには有利です。また、若手の選手が参加しやすいメリットもあります。ルール上、地元開催の場合には、特別出場枠が認められていて、ワールドカップに出場できるランキングを持っていない選手でも、特別に出場することができ、そこでランキングを得られれば、国際大会に出場することができるようになります。そういう意味でもとても重要だし、いい大会だったと思っています。

経済的基盤をどう築くか

スポーツに専念できる環境を得るための課題は、大きく分けて二つあります。試合出場やトレーニングに必要な活動資金の確保という経済的な問題と、所属先の企業や職場での社会的な立場の問題です。活動資金の問題には生活資金そのものも含まれます。いま、多くのパラリンピック選手たちが直面している問題です。

ただこれは、パラリンピック選手だけの問題ではないと思うんですね。どんなスポーツでも、トップスポーツであればあるほど活動するのにお金がかかってしまう。オリンピック同様、パラリンピックも一個人の経済的な努力や負担だけではもう、活動資金を賄えなくなっているのです。ずいぶん前は、オリンピックも個人の努力の範囲で競技活動をやっ

ていた時代もありますが、今は国家、そして企業など社会全体が資金を出す形になっていますよね。

そして今、パラリンピックも、同じような活動基盤を作る必要が生じているわけです。言い換えれば、オリンピック同様の競技レベルに到達しつつある、ということです。このことは、ようやく、オリンピック同様の競技レベルを求められる時代になってきたという喜ぶべきことである一方で、日本では、活動資金を個人が負担していますので、現状は非常に苦しく、何とか打開しなくては行けない、と苦悩する部分があります。

では、どうやってトップスポーツとしてのパラリンピックに必要な経済基盤を築いていったらいいのでしょうか。これはぜひ皆さんにもお知恵をかりたいぐらい、悩ましい問題です。一般の企業であれば、JOC、各競技団体、それからスポンサーの方、所属先の企業といったところから資金が集まるという仕組みをつくっていると思うんですが、JOCに相当するJPC（日本パラリンピック委員会）には十分な強化費用がないのが現状なのです。

障害者スポーツ支援金の現状

1998年の長野大会の後に、社会的な盛りあがりを受けて、300億円の障害者スポーツ支援基金というものがつくられ、運用益を障害者スポーツの活動資金として使えるようになりました。けれども、支援基金から配布されている金額では、選手の活動資金を賅うにはほど遠いのが実情です。

例えば今年、私たちアルペンスキーチームに対して支援基金の中から拠出された予算は124万9,000円でした。これはチームに対する予算でして1人当たりではありませ

ん。パラリンピックはこれとは別に予算が組まれています。この124万9,000円は強化費として国内でトレーニングをしたり、コーチをお願いしたり、コースを借りたり、そして海外に出かけたり、そうしたことも全部含めてこれだけで何とかやってちょうだいよ、というわけです。それが124万9,000円。

この金額がどの程度のものかというお話をしましょう。例えば、10月に2週間、私たちはヨーロッパでシーズンイン合宿を行いました。ここにかかった1人当たりの費用は、53万4,000円でした。かかった費用すべてを参加した選手で頭割りにすると、これだけかかってしまっているんですね。チーム全体としての強化費が124万9,000円というのは、極めて小規模な予算だということがわかりただけだと思います。

300億円の支援金があるということ、パラリンピックの各選手には相当豊富な活動資金が行ったように錯覚されることが多いのですが、これが実態は全くそうではない。

その理由の一つには、傘下の競技団体がとても多いということ。もうひとつは、この300億円の支援金というのは、選手の強化費用のためだけではないということです。つまり、障害者スポーツ全般に対するものなので、配分の仕方がいろいろあるということなのです。選手の強化費だけに使われているわけではないのです。

障害者スポーツ支援基金からだけの助成ではとても足りないもので、ほかに方法を考えなければいけないと、いま各競技団体がそれぞれ個々に活動をやっているところでもあります。もちろん、JPCも手をこまねいているわけではなくて、オフィシャルスポンサー制度というものをつくりまして、読売新聞、それからヤフージャパンほか数社にお願

ていますが、現実にはそれらオフィシャルスポンサーからの資金は、選手強化費用に直接的には使えていません。JPCからは、各競技団体でも資金獲得をそれぞれ頑張ってください、といわれているのが実情です。

障害者アスリートの商品価値

では、私たち選手には何ができるだろうか。そう考えていったときに、トップスポーツを支援するという経済活動のサイクルに、我々障害者のスポーツもぜひ組み込んでもらいたいということです。健常者のスポーツ、例えばオリンピックの選手やチームには企業のCMに登場する代わりに、強化資金を確保しているところがありますよね。同じような形が私たち障害のあるアスリートにもとれないものでしょうか。

わかりやすくいってしまえば、障害のあるアスリートに商品価値があるのでしょうかということです。例えばCMに起用してもらえますでしょうか。私たち選手自身はギブ・アンド・テイクでいいと思っているんですね。これからの時代はそうなるのだと思います。我々が支援してくれた人に対して何か形で返せるものがあるだろうかといったときに、基本的にはやはり選手を起用するメリットが企業にあるかどうかというところを考えないといけない。そう思っています。

なぜそういう話になるかというと、アメリカやドイツ、オーストリアなど、私たちが世界で戦っているライバルたちは、随分とそういう形で企業からの支援を受けたり、チームとしての支援を受けたりしているからです。そういうことが一般的になってきているという実情があります。

では、日本でなぜそれが実現していないのか。あるいはこれから実現するのかどうか。

もし実現しないとすれば何が壁になっているのか。そういったようなところが、私はいま、すごく気になっています。

なかなかわからないのが、障害者というものに対して あえていってしまいますと

ある種のアレルギーがあるのかもしれないし、あるいは障害者は守られるべき弱者だ、という思いこみがあるのかもしれない。障害者というのは「社会的弱者」なのだから守られるべきもので、当事者、つまり障害者は表に出てきていいものではなく、おとなしくしているものだ、という考え方をされる時代が日本でも長くありましたよね。あるいは「障害者をだしにして……」という表現で批判される時代が日本でも長くありました。これは、別に日本だけではないと思うんですけども、日本はそのアレルギーというか思いこみが強いのではないかと感じています。

障害のあるトップアスリートを商品として認められないのは、歴史的経緯のなかで、ある種のタブー化された部分に踏み込めないからなのでしょうか。それとも、パラリンピックというスポーツがマイナースポーツであるからなのでしょうか。どちらが理由になっているのだろうか。そういうものを、私は冷静に考えなければいけないと思っています。

では、パラリンピックは果たしてスポーツとして見られているのだろうか、スポーツとしての価値があるのかどうかということになると思います。今回の一連の報道を拝見している限りでは、パラリンピック期間中に関しては、基本的にはスポーツとして扱われることが増えていると思うんです。すべてだとは思わないですけども、増えているなという気がします。

98年の長野のころと比べると、隔世の感があります。ほんとに時代が変わったなあと思えるぐらい、報道することに戸惑いはない。

というか、パラリンピックを報道するという当たり前の流れが定着したなあという感じがあります。

でも、私たちの活動がメディアに取り上げられるのは4年に1回、たった10日から20日程度なんです。パラリンピック開催前後の10日ないし20日、まあ長くみても20日間ぐらいしか、我々がやっていることを皆さんに知っていただく機会がないというのも実情で、これもいま我々が悩んでいるところなのです。

どうしていったらいいんだろう。その答えは、これも同じようにまだ出てはいないんですけども、我々側がやれることとしては、露出の仕方とか、情報の出し方というものを考えていかなければいけない。取材されるのをただ待っていればよいのはパラリンピックのときだけだと、よく私は競技団体の人たちと話をするんです。メディアが来るのを待つだけでなく、もっと表に出ていく努力をするべきだろうと思っているんですね。

年間300万円の自己負担

この4年間、選手は本当に自腹を切ってきてきました。多くの時間と、そして資金を使っているのです。メディアの皆さんに何度か申しあげていることですが、アルペンチームに関していえば、年間300万円ぐらい、個人で負担しなければいけないんですね。この金額が多いか少ないかは、ここで申しあげようなことではないかもしれないんですが、ただ選手自身が高額所得者というケースはあまりありません。資金的な側面から限界を感じている人が多いということは、一ついえると思います。

特に、私が危惧しているのは、若手の選手です。このままだと選手として育っていくこ

とが難しいのではないかと。若手の芽をつぶしてしまうんじゃないのかということをごく考えています。

森井大輝という選手がいますが、彼は25歳で、今回シルバーメダルを1つ取りました。2回目のパラリンピックでメダルが取れて能力的にも高い選手だし、これからまだまだ伸びる選手なんですけど、「もうお金続かないから、このままでは続けられない」といっているのが現状なんですね。それを、「いえいえ、やりがいがあるから続けましょうよ」とか、あるいは中学生や高校生で親のすねをかじっている若い選手に、「パラリンピックはおもしろいから挑戦してみない？」「パラリンピックの社会的意義はすごく大きいからやってみない？」と気軽に声をかけられない。それがいま、私の悩みなんです。

私自身もちろん、選手を続けていけるのかどうかは経済問題とは無縁ではないですし、社会的な地位というか、自分の人生にもかかってくる問題なので簡単には決められないんですが、全体を考えたときに、経済的な基盤なくしてパラリンピックでのメダルなしというのは、もうこれはどうしようもない現実です。ですので、何とかそれを改善しないといけないということを、いま私は強く思っています。

パラリンピックのメダルというのはどういう価値があるんでしょうか、ということで、ここにいる皆さんのお知恵をかりたいと申しあげたのはそこなんです。

この4年間、私は自己満足するためだけに多くのお金を使い、多くの時間を使い、職場や同僚に、休んでいる間、仕事ができない分のある種の迷惑をかけ、家族にも多大な応援をしてもらってやってきたんだろうか...。やっていることは、しょせん自己満足にすぎないことなんだろうかと自問自答していました。

自答できないんですね。いやあ、どういふうに考えたらいいんだろうと悩みます。ただおもしろいからとか、スキーが好きでやっているとか、そういうだけでは、もうこれだけのことをやるにはあまりにも代償が大きい、支払うべきものが大き過ぎるという状況になってきています。

じゃ、そうなるとパラリンピックのメダルにはどういう価値があるんだろうか、その価値を上げていくにはどうしたらいいんだろうか、と考えるわけです。

いまはまだ、自分の中でも整理がつかない状況です。多分すぐに結論がでる問題ではないと思うんですけれども、何か進めなければいけない、踏み出さなければいけないと思っています。そのために私がやれることは何だろうということはずっと考え続けた4年間でもあり、これから先も考えていかなければいけないし、ぜひ皆様にも教えていただきたいと思っています。

(質疑応答)

斉藤道雄 (司会・企画委員 TBS) 大変興味深いというか、ある意味では極めて深い話がたくさん出てきたと思います。メダルの価値というと、我々は普通のオリンピックの場合には金メダルすごいよね、という形で考えますけれども、もちろんパラリンピックの場合だって金はすごいんだろうと思うんですよ。けれども、取った選手ご自身が、そのメダルの価値をみずからどういう価値があるのかと考えているというのは、僕は初めて聞きました、それは随分深いことだなあと感じます。

司会の役柄上、まず最初にまことに平板な質問を2つ、3つすることをお許しいた

たいんですけれども、金メダルと銀メダル2つをお取りになった。いまそのメダルの価値ということもありましたけれども、そうはいつでもそれはそんなに簡単なことではないだろうと思います。金・銀をお取りになって、正直なところ、どんなご感想ですか。

大日方 自分自身の滑りということに関しては実はあまり満足していないんですね。もっとやるべきことがあったというか、やれなければいけなかったと、自分の滑りに対しては思っています。

特に2つ目のシルバーメダルだったスーパー大回転は、私の中ではやってはいけないうミスをしている滑りなので、まだまだ甘いなあと(笑)自分にはそういう気持ちもあります。競技としてみたときに、非常におもしろいレースができたとは思う一方で、本当に勝ちたかった。スーパー大回転は勝ちたかったし勝てるべきレースでもありました。勝つ力はあったはずなんですけれども、それを出し切れなかったのはやはり自分の責任とっていて、まだ未熟な部分があった大会でした。そういう意味では、大回転は勝ててよかったと思っています。

斉藤 恐らくそういう感想の持ち方というのは、オリンピック選手の場合も同じようなことがたくさんあると思うんですよね。

それで、チェアに乗ってのスキーというのを我々にわからせようとするのは難しいことかもしれないのですが、そうやって1本のスキーで滑る、あるいはいすに乗って滑る、しかも一番出るときは滑降で100キロほどのスピードが出るということですね。我々素人にはとても出せないスピードだと思うんですが、そういう競技の難しさというか大変さ、あるいは逆にそこから出てくる楽しさみたい

なものがあれば教えていただきたい。

大日方 板1本で滑るということに関しては、まずリカバリーがききにくい、ミスが許されないスポーツ、という要素が大きいと思うんですね。2本で滑っていれば転倒しないようなちょっとしたミスも、1本の板ゆえに、バランスを一度崩したらリカバリーするのは難しいと思います。2本で滑るよりも、精密さを求められているような印象が私の中にはあります。

斉藤 2本で滑っているときには「ちょっとぐらつきましたね」などといってしまうような、わずかなミスが許されないという感じなんですね。

大日方 そうですね。アルペンスキーというのは、ある意味でリカバリーの連続で、微妙なバランスをとりながら、よりよいラインを目指していくスポーツなわけですね。そもそも競技特性としてリカバリーが連続するものであるにもかかわらず、チェアスキーの場合、バランスの許容範囲が狭いわけで、リカバリーしづらい部分にどう対応すればいいのか、と考えたときに、より精度を上げていく必要がある。技術の精度を上げていく必要があるんじゃないかと思っています。そしてそこがまた魅力だったりするわけです。

斉藤 それが雪の面を読む力とか、それをどれだけ事前にうまくイメージーションを働かして、ここをこう抜けていくんだというふうなことを考えながらやっていく。それがピタッと決まったときのおもしろさとか、決められなかったときの悔しさとか……。

大日方 そうですね、はい。まさにそのと

おりなんです。

スラロームで転倒してしまいましたが、あれは、私が雪質と斜面変化を一瞬読み違えたゆえだと思っています。わずかな読み違いとか…。技術的には、ここをこう滑ろう、と頭の中では組み立ててスタートしますし、実際の動きの中では頭で組み立てる以上に体が反応するものなのですけれども、あのときは、そこがうまくはまらなかった。そのことが結果的にああいう転倒につながり、旗門不通過という形で終わりました。自分の頭の中で考えたイメージと身体の動きが一致しなかったケースとしては、一番わかりやすく結果に表れた例だなと、自分では思っています。

斉藤 それが昔だったらば、まあ障害者だからしょうがないでしょう、というように受けとめられていたかもしれないけれども、いまはそういう気持ちでいったら勝てない、そこまで競争は激しくなっているということですか。

大日方 はい。スラロームは特にそういう要素が強いんですね。今回結果を残してなくていうのも何ですけれども、本来は、非常に攻撃的な戦いが求められている種目です。

スラロームという種目は、オリンピック選手を含む立って滑る選手は、ポールをなぎ倒しながら滑っていきますよね。これが座って滑っている私たちの場合、ポールに対してより根元に近い位置で当たりますので、なぎ倒すのには非常に力も必要ですし、タイミングも難しいし、それゆえに減速するリスクが大きいんですね。

ポールをなぎ倒しながら滑るテクニックは、技術的にもとても難しいことなんです。ソルトレークするときにはポールを倒していく技術を使わない選手が半分ぐらいはいました。

ところが今回、トリノで出てきた男子の選手ほとんどがその技術を使っていた。ポールをより直線的にいいラインを攻めていくために結果的にポールを倒していく滑りが行われるようになってきていました。

女子でも、先ほど3カテゴリーの話をしてきましたが、障害別の細かいクラス分けをやめて、かわりに障害の程度によって係数を掛けていくというルールになりましたので、そのなかで勝っていくためには、私のように障害が一番軽い選手は、よりアグレッシブに滑っていく必要が当然出てくる。逆に、障害の程度の重い選手は、戦略的にミスが少ない滑りをするのが求められる。そういう競技としての一層のおもしろさは出てきていると思います。

斉藤 そうやって競争が激しくなってきたということは、ある意味でいいことだとも思うんですけども、それをあんまり進めてしまうと、パラリンピックというよりオリンピックに近づいてくるんじゃないかという気もするんですね。これは、障害を持つということ、それから障害を持たないということ、あるいはその障害とは何かということと深くかかわると思うんですけども、例えば旗を倒してまで滑るようにしていくということを追いかけていくと、その方向の先にあるのは何なのか。健常者と互角に戦うというようなことを目指していくという発想なのか、それとも、その先には何かもうちょっと違うものをみながら、やっていたらいいんじゃないでしょうか。

大日方 非常に深い質問だなというふうに...(笑) 考えさせられる部分もあるところですけども。

私の中で一番考えたいのは、障害者、健常者という分け方に、どれだけの意味合いがあるだろうかということなんです。

そもそもスポーツということに関しては、例えば、障害者、健常者と分けることにどういう意味があるのかということを考えなければいけない。よく障害者スポーツといいますがね。パラリンピックというのはご承知のとおりリハビリテーションから生まれてきているものですが、徐々に役割や意義は変わってきていると思います。今日では必ずしも障害者スポーツ=パラリンピックではないということ、ぜひ皆さんにはわかっていたいただきたいのです。

わかりやすい例えで言えば、マラソン=オリンピックとは思わないですね。マラソンを楽しむ方の中には、皇居のお堀で毎日ジョギングされる方もいらっしゃるし、市民マラソンに出場することを目指す方もいらっしゃる。もちろん高橋尚子さんのようにオリンピックを目指す方もいる。でも、みんなマラソンランナーということですよ。同じように、障害のある人がマラソンをやっているから、といって、必ずしも全員がパラリンピックを目指すわけではない。

障害者スポーツという名前で枠づけをしてしまうことでわかりづらくなって、ボタンを掛け違いやすくなっているのではないかと危惧しているんですね。

私が目指したパラリンピック これはたまたま私に障害があるから目指したものがパラリンピックだった、というだけで、競技スポーツの頂点の大会ということであれば、オリンピックと同じ意味合いを持つものになるべきだと私は思っていますし、世界的にもその流れはとめられないし、とめる必要もないと思っているんですね。

一方で、じゃパラリンピックだけが障害者スポーツだというふうに思われてしまうと困るのです。パラリンピックに出場しない、例えば市民マラソンじゃないですけども、障害がたまたまあってもスポーツを楽しむ人は

幾らでもいるはずだし、もっと増えていかなければいけないわけです。パラリンピック選手がいる一方でそういう人たちもいるし、その人たちのすそ野も広がっていかないとはいけません。

パラリンピックの種目になるものはルールで決められているし、出場できる選手の障害の種類、程度というものが決まってしまうのは、スポーツにはルールが必要なわけで、仕方ない部分もあります。でもだからといって、そこに分類されない障害のある人がまったくスポーツを楽しんでいないのかということ、またちょっと違うはずですよ。世界一を競うというのはあくまでスポーツの楽しみの一つにすぎないわけです。そこをぜひ、皆さんに整理した形でわかっていただけるとうれしいなと思っています。

旗野寿雄（朝日出身） 実はビジターとして学生を1人連れてきたんです。いまお話しなされたこととちょっと違うかと思うんですけども、学生の率直な質問です。

一つは、いままで生きてこられて、あるいはスキーをやってこられて一番学んだことはどんなことでしょうか。それから、いまの若者に何かいいたいことがありましたら、ぜひ聞かせていただきたい。

それからもう一点は、何か一つだけ願いがかなうことがあるとしたら、それはどういったことをしたいですか。

大日方 そうですね、一つ目と二つ目が、同じ答えになるかと思うんですが、スキーを通して学んだことは、挑戦する気持ちだと思っています。何事も、工夫と努力次第でできるんじゃないかなあとおわせてくれるものが、私にとってはスキーだったんですね。やる前からできないよ、ではなくて、どうしたらで

きるんだらうということを考える生き方を、多分これからも続けていくと思います。先ほど申しあげたこともその一つで、私にとっては挑戦なんです。

若い人たちには、挑戦する気持ちというか、とりあえずやってみようよという、ある種のフットワークの軽さというようなものをぜひ持ってほしいなあとと思っています。

一つだけ願いがかなうなら、何したいかなあ……。欲張りなので一つだけというところすごく難しいんですけども(笑) どうでしょう。いまほんとに、ちょっと考えられない(笑)。すみません。

斉藤 お金などは頭にはないですか。強化費が10倍になればいいとか…。

大日方 そうですね、100倍ぐらい必要だというものもあるんですけど...(笑) いま一瞬思ったのは、宝くじ当たるといいなあ(笑) すみません、下世話で。

村野賢哉（NHK出身） 前回、長野大会直後においでになったとき、健常者という言葉に対して、どうお考えになるかということをお聞きしました。僕自身あのときはいわゆる健常者だったんですが、その後80を過ぎまして、いま身障者手帳を持っているんです。人間というのは年をとってくると、みんな障害者になる。なぜ健常者といわなきゃいけないのか。むしろ、障害者の方が普通の人よりはるかに能力を持った人がたくさんいると思うのです。僕は前回、日本のマスコミが声を上げて「健常者」と「障害者」という言葉をやめたらどうかというキャンペーンが起こるかと思ったんですけども、とうとう起きなかったんですね。

「健常者」という必要はないんで、「普通

の人」でいいだろうと思うんですよ。普通の人の中で特別に身体的にもあるいは精神的にも具合の悪いことが起こった人を「障害者」というのはいいんですけど、「健常者」と「障害者」という区別の仕方が気になっているんです。大日方さんはどうお思いになりますか。

大日方 私も、できれば障害者スポーツとかいいたくないんですよ。それにかわる言葉がないので、便宜上そういつているのです。「健常者スポーツ」とはいわないですよ。いう必要もないでしょうし。たまたまスポーツをする人の中に障害がある人がいる、その人がスポーツをする、それをあえてカテゴライズする必要があったときだけ「障害者スポーツ」と呼べばいいだろうと思っているぐらいです。

どうも日本はスポーツに限らず、障害者をすごく特別にみる傾向がまだありそうなんですよね。でも例えば、私自身のことであれば、あえていうなら障害者ですけども、同時に、NHKの職員という肩書もありますし、結婚もしていますので妻という肩書もあるでしょう。そういう何か一人の人間としてのものが先に来て、その中でたまたまこういう障害がある、ということだろうと思うのです。

「障害は個性です」という言い方をよくしますけれども、ほんとにそのとおりだなと思っています。何とかして障害者という言葉がひとり歩きしないというか、必要以上に前に出過ぎないような社会になってくれればいいと思っています。そうすれば、いま感じているような壁　あえていえば壁が低くなる、少しずつ差がなくなっていくんじゃないかなというふうに思っています。

佐藤次郎（東京新聞） このままどんどん競技化が進むということが、パラリンピック

にとってどうなのかというのは当然出てくると思います。矛盾が出てきたり、あるいは、難しい問題が出てきたりもするでしょう。いろんな問題を考えたうえでということですけども、競技化はどんどん進むべきだとお考えですか。あるいはオリンピック化というのもどんどん進むべきだとお考えですか。

大日方 いろんな問題というのはとても深いと思うんですけども、私自身は現段階では、パラリンピックはオリンピック化して構わないと思っています。競技化が進めばいい、一層進むことにためらいはありません。

いろいろな問題というのがどこを指すのか。一つ一つすごく大きな問題なので、皆さんのお考えになっているいろいろな問題と、私が考えているいろいろな問題とは必ずしも一致しているかどうかはちょっとわかりません。私個人の考えとしてはパラリンピックはオリンピック同様、一層競技化が進むことは悪いことではないと思っています。

佐藤 それに関して、競技レベルはどんどんでもないにしろ上がっていると僕はみています。夏冬双方の競技で、まだまだ上がる余地があると思われませんか。それと、選手たちの意識ですね。かつてはごく一部の人にアスリートになりたいという意識がありまして、それを現実にした人もいるわけですけど、いまはどうなんでしょうか。かなりそういう意識を強く持って、そういう取り組みをしている人が増えているんでしょうか。

大日方 うーん、競技力はまだまだ向上する余地は大いに残していると思います。特に自分でいうのもおかしいんですが、女子はまだまだ男子と比べると、より一層向上される芽はあると思います。どんな種目でもオリン

ピックでもより一層、競技力が高くなっていくのは必然の流れでしょうけれども、パラリンピックも同じです。オリンピック以上に伸びしろというか競技力の向上率というのがいまいかがわかりませんが、それはあると思います。

一方で、選手自身の気持ちでいえば、今回特に私が感じたのは、金メダルを取ることは非常に難しいなということでした。自分で挑戦してみて、優勝すること、世界で一番になることはすごく難しいことだと思いました。それをやるためには、やはり技術もそうですし、体力もそうですし、精神的なもの、戦略的なことすべてがそろって初めて取れるものだという意味では、とても価値があるものだと思っています。

東谷隆介（共同） 活動資金というものを視野に入れた場合に関連するのですが、アメリカ、ドイツ等の外国勢が企業の支援を受けているというのは、私は寡聞ですけれども、かなりプロ化して活動している選手が、特に夏季競技の中でも多いと聞いています。日本でそういうことが実現する可能性は多分ないという説明だったと思いますけれども、いまの選手活動をしながら、企業ないし社会的な支援を受けるということから一歩進んで、いわゆるプロフェッショナルとしてスポーツの道を歩むという考え方は、いまの日本のパラリンピックの選手には、どの程度浸透しているのでしょうか。

大日方 私が知っている限りでは、多くの選手がプロとして活動することを望んでいると思います。現在、プロとして活動しているパラリンピックの日本選手は数名いますけれども、終わった後どうするんだろうという切実な問題も現実にはあります。その部分も含めて、考えていかなければいけない問題だ

と思っています。

ですが、私の周りでは多くの選手がプロとして活動したいと考えていますし、それができないとは思っていないんですね。どうしたらできるかを考えたいと思っていて、逆に、できないとすれば何が障害になっているんだろう。そういうところを考えれば答えがみえてくるのかなと思っています。

ですので、ぜひプロとしてパラリンピック選手を使ってくれる企業があったらお知らせいただきたいんですけども。

斉藤 そのプロというのは、自分で生活できるという意味でのプロになっている人もいるということなんですか。

大日方 うーん、プロと名乗るか名乗らないかというのもちょっとあいまいなんですけれども。例えば、ある企業から最低の生活はこれだけでやりなさいよ、と支援を受ける。それとほかに、これだけの活動資金を出しましょう、というようなものもあります。セミプロというか企業内プロのようなものもあります。ノルディックチームがそういう形ですけれども、午前中だけ仕事をして午後はトレーニングをする。こういう形も、考えようによってはプロでしょうし。もっとフリーに

陸上の選手なんかで何名かいますけれどもここで勝ったら幾らというような契約を結んで、それで生活しているという人もいます。いまはプロというのがどういう定義なのか、人によって考えが違う状況ですね。

私はそういう意味では完全にアマチュアです。ほかの選手などは企業との雇用のあり方という部分で、たぶん今後大きく変わってくると思います。この先の4年で大きく変わるの、日本ではそこかもしれないですね。

齊藤 長野、ソルトレーク、トリノと時代を経て、パラリンピックそのものも変わってきたし、パラリンピックをみる私たちの目も変わってきたところがあると思うんですね。

プロが成立するかしらないかなども多分我々自身がパラリンピックをどうみるかという、大日方さんのいうメダルの価値ということと密接に結びついているとは思いますが、これから先もどんどん変わっていくという感じをお持ちですか。

こういう言い方が正しいかどうかわかりませんが、オリンピックは金もうけのチャンスにも道具にもなっているわけですね。パラリンピックはオリンピックと同等の規模にはならないかもしれないけれども、ああいう形でスポンサーをみつけてきて、お金を動かしながら自分を実現していくという方向に向かっていくんだらうか。それをするためには、パラリンピックとか障害というものに対する私たちの見方も変わっていかなければいけないところはあるかもしれませんが、動いているのはそちらへの方向ということなんですか。

大日方 動きとしてはそちらの方向だと思えますし、そうなってくれるといいなと思っています。そのことが結果的には、障害がある人の可能性という意味で、新たな1ページを開く機会になってくれるんじゃないか。その願いを込めてそう思っています。

金もうけというお話もありましたけれども、パラリンピック界では現状、もうけるまでには当分行き着かないですから…。

齊藤 でも、選手の皆さんとしては、これで金もうけになるといいなという気持ちもあるんじゃないですか。

大日方 一番心配なのは、いま10代の高校生の選手などですね。パラリンピックに向けてスキーに打ち込んで、ほとんど勉強も何もしてないんですよ(笑)。いや、そんなこといったら、だれのことっているのかすぐわかっちゃいますけど…。

ただ、そういうようになってきたときに、彼がどうやってこの先、生活していくんだらうか。そう考えていくと、彼が長く選手として活動した場合、仮に私がいま望んでいるようないいスポンサーがみつかって、パラリンピックで生活をやれたとして、例えば40歳までやれたとしても、人生80年の時代に、残りのあと40年をどうやって生活していくんだらうか。40歳になって、スキーしかできないようになってしまうわけですね。しかも、そのスキーすらできなくなる。ですから、選手としての役割を終えたときに、どうするんだらうという問題は切実だと思います。

例えばそれが一般のスキーヤーであればコーチング業などのビジネスにつながっていくかもしれませんが、でもパラリンピックというのは、障害のある人のスキーと限定をすると、パイは小さいんですよ(笑)。そのあたりの問題もあるので…。この点は、どのスポーツも同じという部分はあると思いますけど。

齊藤 いまのお話は、パラリンピックだけでなく、オリンピックの選手でも思い浮かぶような人がいるわけだから、目指すところが激しい頂点ということであれば、結局、同じことにはなるのかもしれませんが。

それからもう一点うかがいたいのは、トリノ・オリンピックでもそうでしたが、「楽しんできました」という選手がいますね。ところが、お役人の中には「いろいろと支援を受けておいて、メダルを大して数も取れなかった

のに楽しんだとは何事か」と文句をつけたという話があるんですね。「楽しむ」とか「楽しまない」というのは、結構、本質的な問題ともかかわると思います。大日方さんは「楽しんでできました」という感じではないんですか。そういう言い方に対しては、ちょっと違うというものがありますか。

大日方 競技は楽しいです。楽しかったです。そういう意味でいえば、私自身もパラリンピックはすごく楽しんでできました。

それに、スポーツは別に苦しまなければいけないものではないと思います。もちろん大きなプレッシャーがかかりますし、スタート前のドキドキ感もあります。それに至るまでのトレーニングは決して楽ではなくて、苦しいことだってたくさんあります。ただその先にあるものは、やはり競技が好きという、根本的なものだと思うんですね。「負けても楽しかった」という選手の発言は、スポーツとしての楽しみを言ったのだらうと思いますから、そのことだけで国のお金を使ってとは個人的には思いません。

でも、世間からの一定の期待というのはあると思うので、発言がどういうシチュエーションだったのかわかりませんが、仮に「まあいいじゃん、楽しかったんだから別に～。結果なんかどうでもいいよ」というようなニュアンスで、自分が楽しんだから文句ないでしょうぐらいの感覚だとすれば、それは違うとは思いますが。

旗野 今度は私の個人の質問です。障害者スポーツに限らないんですけども、最近のスポーツ報道についてどう思われますか。大日方さんは取材者でもありますよね。スポーツが商業化していますけれども、スポーツ報道は結局、コマーシャルの一端を担っている

ような感じを、個人的にしているんです。そういうスポーツ報道のあり方について何かお考えになっていることはございますか。

大日方 そこは私自身がすごく考えることの多い部分なんです。何だろう 何か結果だけ、メダルを取れたか取れないかみたいなことですね。オリンピック報道でいえば、そこがすごくクローズアップされ過ぎる感じはしています。スポーツってもっとおもしろいものなのになあ...、スポーツが本来持っているおもしろさが伝わってないんじゃないかと感じています。

私がやったこともないものに野球がありますが、最近になってようやく、私は野球のおもしろさがちょっとわかってきたような気がしているんです。実はそれまではいったい、この競技のどこがおもしろいんだらうって思っていたんです。けれども、ボールを投げてそれを打つ、というその裏側には、選手の駆け引きがすごくあるんですね。

ヤクルトの古田さんが現役選手でありながら監督も兼任することになった、その裏側を追った番組を見ていて、ああ、キャッチャーってこういう駆け引きのおもしろさがあるんだなあって思ったんです。もしかしてこの面白さが、野球を続けている理由の一つなのだらうか、選手としてまだ伝えたいことがあるから、選手をやりながら監督をやっているんだらうか。きっとそういうことなのかなんて、自分なりに思ったりしたんです。その番組をみてから、キャッチャーがどういう動きを試合の中でするのが、とても興味がわきました。

プロ野球はあんなにたくさん流れているけれども、私は長いこと気づかなかった。例えば、そういうスポーツの面白さに迫る部分をもっと報道したらいいのかなとは思っています。

オリンピックでもメダルの数だけではない

報道の仕方もあると思います。先ほど、商業主義というお話がありましたけれども、スポンサーに影響されて、実力が本当にあるかどうか客観的に見ることなく、むりやり変な盛り上げ方をした競技も一部にはあるような気がします。

報道をする側は、ほんとおもしろいと思って取材しているのでしょうか、というところだと思うんですね。取材する側が、どこにおもしろさを感じているかというところが原点だと思います。

当たり前のことですけれども、パラリンピックも同様です。いっぱい取材していただいて、皆さん、それぞれどこにおもしろさを感じているのでしょうか。逆に、私は選手としての立場で教えていただきたい。そこをアピールしますから、という感じなんです。(笑拍手)

文責・編集部